

商品資料館便り

商品資料館の楽しみ方

「カオスを楽しむトリップする」

経営学科准教授

松田 温郎

商品資料館に行ってみた。何とも言えない、アンニュイで、メランコリックで、エキゾチックでシユールな空間だった。結論を言えば、こちら側に楽しむ準備ができていれば(ここ大事)、いい感じにトリップ(妄想)させてくれる、想像力が豊かな人にはポテンシャルの高い施設である。

山口市には湯田温泉を中心とした繁華街があり、その中に井上公園という歴史的な場所かつ未就学児にいい塩梅の遊具がある場所がある。遊具の話はどうでもいいのだが、そこに歴史的な趣があるは、なんとそこが井上馨の旧宅跡地だからである。

井上馨といえば、明治期に欧化政策を推進した中心人物であり、鹿鳴館で舞踏会をしている猿の絵を中学時代に学んだ記憶がある。時代背景として、欧米の舶来物がどんどん日本に入ってきた時期であった、と理解している。やれ仏蘭西のパヒュームだとか、英吉利のスूपだとか、亜米利加のパンアップルだとかである。そういうものが商品資料館にも展示されている。しかもまさに当時に入手した、きつと価値のあるものにちがいない。

ここで、前述のちよつとした背景を知っていれば、いい感じにトリップ(妄想)できる。「うわー、このスूप、当時のものをたいそうに瓶詰してるけど、もう蒸発しちゃって跡形もないやん。でも、当時としてはこの得体のしれないスूपなるものの価値つてもすごかったんやろな。市長とかまちの偉い人のお屋敷で、わざわざスूपのお披露目会とかして、それが

人気になって選挙に当選とかしてたんかなー。いや、対抗馬のライバルはパヒュームとかを紹介して、票を取り合ってたんかなー・・・(飽きるまで続く)」と、数分ほど楽しませてくれる。数分、程よい時間だ。

繰り返すが、目の前に展示されているスूपはとくに蒸発してしまつて、瓶の底にはかつてスूपだったはずの黒いなかがかびりついているだけである。だが、それがいい。仏蘭西のパヒュームも、亜米利加のパンアップルも、当然原形をとどめていない。だが、それでいいのである。その無さが妄想力をかきたててくれるのである。その無さが当時から現在まで一〇〇年余りの歴史を感じさせてくれるのである。「スूप・・・ないやん」とツツコミをいれた野暮な観覧者は通算一〇〇〇人はいるのでなかるうか。

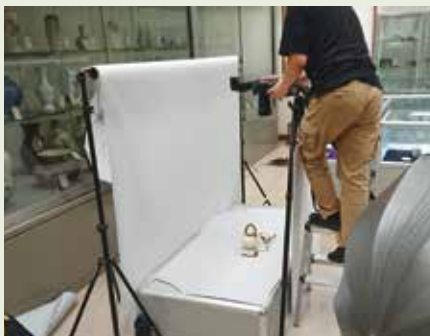
さて、そんな当時の舶来物コーナーの横には、乱暴に捨てられた、ではなく所在なさそうに途方に暮れている数十年前製のワープロやパソコンたちが、技術革新の残滓をぶんぶん漂わせてくれている。ぶんぶんどころかビュンビュンに薫ってくる。一歩先へ進めば、郵便局で配布されていた干支の貯金箱が、なぜか特定の干支に偏つて展示されている。果たして、「平成三年収集」の解説に意味はあるのであろうか。この空間の妙味を、カオス以外の言葉を使わずしてどのように表現できるであらうか。これは誉め言葉である。

いっそ、上記のような嘘エピソードだけを集めた珍展示とかしたらいいのに。

一転、ある昼下がり、井上公園のベンチに座りながら、公園に解き放つた我が子供たちの様子に多少の気を配りつつ、井上馨に思いをはせてみる。「あのスूप、実は一〇〇年前にここ井上家で飲まれてたやつだったら面白いな。実は使用人さんがあれをこうしたやつで・・・。」トリップは続く。

学術資産継承事業

学術資産継承事業の一環として、商品資料館の7,800点を越える収蔵品もデータベース化を進めています。今年度はデータベースへ加える写真の撮影も始まりました。



撮影の様子

